



FUKUSHIMA UNIVERSITY

GUIDE 2027

— 福島発、未来行き。 —

— 変化の時代に、進化で挑む。 —



国立大学法人

福島大学

Fukushima University





未来へ動き出す、福島大学。

変わる世界へ、君自身の進化で踏み出そう。

福島大学は、
学部制という新たなステージへ。

目指す目的がより明確になり、社会の変化に向き合いながら、自分の未来を自分で選び取るための学びがさらに広がります。正解のない時代を生きるうえで大切なのは、知識だけでなく、仲間と協働し、試行錯誤し、自分らしい答えを見つけていく力。変化の時代に進化で挑む福島大学は、“君自身の進化”もともに育てていきます。変わり続ける世界へ、ゆっくりでも確かに一歩踏み出したい人へ。ここから、未来へ動き出そう。



CONTENTS

01 未来へ動き出す、福島大学。

- 03 学長Message
- 05 福島大学グランドデザイン2040
- 07 政経学部について
- 09 福島大学研究最新動向
 - 11 F-REIでの研究
- 13 カリキュラムの特色
 - 15 地域×データ実践教育プログラム
 - 19 共創知教育
 - 21 国際交流
- 25 学びと未来のフローチャート

27 教育学部 (仮称)

- 27 学類長メッセージ
- 28 学部の特色
- 29 カリキュラム／資格
- 31 「系」について
- 33 地域課題探究コース／グローバル探究コース／STEAM教育コース
- 34 教育臨床コース／インクルーシブ教育コース／Notable Research
- 35 学類生の1週間と4年間
- 36 地域で活躍する先輩たち／卒業後の主な進路

37 政経学部 (仮称)

- 37 政経学部設置準備室長メッセージ
- 38 学部の特色
- 39 ゼミ紹介
- 40 Notable Research
- 41 カリキュラム／資格
- 43 産業・地域社会イノベーションコース／経済経営コース／公共政策デザインコース
- 45 Topics
- 46 学類生の1週間と4年間
- 47 地域で活躍する先輩たち
- 48 進路情報／政経学部誕生までの沿革

49 理工学部 (仮称)

- 49 学類長メッセージ
- 50 学部の特色
- 51 カリキュラム／資格
- 53 情報理工学コース／メカトロニクスコース
- 54 Notable Research
- 55 分子デザイン科学コース／環境システムコース
- 56 特修プログラム
- 57 学類生の1週間と4年間
- 58 地域で活躍する先輩たち／卒業後の主な進路

59 食農学部 (仮称)

- 59 学類長メッセージ
- 60 学部の特色
- 61 カリキュラム／資格
- 63 食品科学コース／農業科学コース
- 64 フィールド環境学コース／農業経営学コース
- 65 学びのポイント
- 66 Notable Research
- 67 学類生の1週間と4年間
- 68 地域で活躍する先輩たち／卒業後の主な進路

69 大学院

- 71 センター／研究所紹介
- 75 キャンパスライフ
 - 75 マップ
 - 77 キャンパスガイド
 - 79 Student Life／年間スケジュール
 - 81 インタビュー
 - 83 クラブ&サークル
- 85 就職・進路情報
 - 85 就職・進路支援
 - 86 進路状況
- 87 入試データ
 - 87 入学試験統計／都道府県別データ
 - 88 学費／奨学金／募集要項／オープンキャンパス情報



進化する大学で、 深化する学びを

福島大学は、2027年度より新たなステージへと歩みを進めます。

少子高齢化の進行、ICTの急速な発展、地球温暖化による異常気象、そして世界各地で続く戦争や紛争。現代社会は、これまでに以上に複雑で多様な課題に直面しています。とりわけ、AI技術の進歩は著しく、2045年には、人工知能が人間の知能を超える「シンギュラリティ」を迎えるとも言われています。

このような時代において、社会の課題の多くには一つの正解がありません。異なる知識や価値観を持つ人々が協働し、多様な視点から考え、試行錯誤を重ねながら解決の糸口を見出していくことが求められています。社会の変化に対応するためには、私たち自身、そして私たちが生み出す「知」も進化していかなければなりません。

福島大学では、こうした社会の要請に応え、地域に根ざしたイノベーション人材を育成するため、2027年度より従来の3学群5学類体制から、「教育学部」、「政経学部」、「理工学部」、「食農学部」の4学部体制へと改組します*。新たな学士課程では、各分野の最先端の知識と技術を学ぶ専門教育に加え、文理融合・分野横断型のカリキュラムからなる「共創知教育」を展開します。これにより、身につけた知識や技術を社会の中で活かす力、すなわち「社会実装力」を備えた人材の育成を目指します。

また、福島大学は、学生・教職員一人ひとりが主人公となり、互いを尊重しながら学び合う大学でもあります。開学以来、自主性を重んじる伝統と協働の精神が受け継がれ、キャンパスには多様な価値観に触れながら成長できる環境があります。2025年

には「福島大学DEI推進宣言～ちがいに会う ちがいから学ぶ～」を策定し、誰もが安心して力を発揮できる学びの場づくりを進めています。

福島県は、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故という大きな困難を経験した地域です。しかし私たちは、その経験から学び、より良い社会を築くための挑戦を続けてきました。授業での実践や学生のボランティア活動を通して培われた「知」は、本学の大きな特色である「復興知」として今も受け継がれています。本学では、この復興知とデータサイエンス教育を融合した「地域×データ実践教育プログラム」を必修科目として実施しています。地域の課題をデータに基づいて分析し、実践的な解決策を考える学びは、福島だからこそ実現できる教育です。

福島大学の教育は、教科書に書かれている知識を一方的に教えることだけを目的としません。学生自身が社会というフィールドに飛び込み、課題を発見し、仲間と共に探究しながら、自らの生き方や社会の未来を考えていく、そのような主体的な学びの場を大切にしています。

福島大学での学びは、変化の激しい時代を生き抜く力を育てます。私たちとともに、新しい学問の扉を開き、未来を切り拓いていきましょう。

福島大学学長

佐野 孝治

※学部名称はいずれも仮称であり、変更の可能性があります。



福島大学 グランドデザイン2040

変化の時代に、進化で挑む。
Fukushima Dynamism

福島大学グランドデザイン2040とは？

「2040年に福島大学がどんな姿になっていたいか」を示した長期的な未来計画です。これから急速に変化する社会の中で、大学としてどんな価値を生み、どのように学生を育て、どんな研究を進めていくべきかをまとめた「大学の設計図」です。

「正解のない問い」に挑む力を育てる！

これからの社会は、教科書に載っていない問題ばかり。福島大学では、実際の地域の課題に向き合いながら、自分で考え、仲間と協力して答えを探す力を育てます。

地域と世界をつなぐ研究を強化！

東日本大震災以降、福島大学は多くの研究プロジェクトを生み出してきました。これからは、人文社会科学、環境やエネルギー、食と農など、最先端の分野を横断した研究を通じて、社会を変えていきます。

大学として対応すべき課題

- ◆国立大学法人としての機能強化・発展
- ◆少子化問題への対応
- ◆財政基盤の強化
- ◆社会における諸問題を解決・緩和できる人材育成

大学改革

ミッション、ビジョン実現向け、新たな教育研究組織を構築

- 教育と研究を一体的に行う新たな学士・修士・博士課程へ改組
- 学長のリーダーシップで意思決定を効率化するためのガバナンス体制の見直し・整備
- 持続可能な大学を目指す財政改革
- 組織と研究分野の再構築で本学の強みを強化
- 県内外の高等教育機関と連携を強化し、機能の共有を実質化

福島大学グランドデザイン2040のポイント

VUCAと呼ばれる不確実な時代において、福島大学は法人化や震災対応で得た知見を基盤とし、人口減少をはじめとする次の課題解決へ向けた取り組みを進めています。

詳しくはこちら



ミッション(使命)

- 「新しい社会のあり方」を提案できる大学
- 個人のWell-being、社会のWell-beingの実現を目指す大学
- 激変の時代に「柔軟に、かつ強靱に」取り組む大学

ビジョン(目標)

- 「正解のない問い」にチャレンジできるイノベーション人材の育成
- 地域と世界における現代的で複雑な課題解決のための研究強化

バリュー(行動指針)

教育

- 問題解決型教育の推進
- 異分野融合を促進する教育組織の再編
- 教育の質保証徹底と学修者中心のカリキュラム構築

研究

- 異分野間の共同研究を推進
- 人文社会系との融合を期待した理・工・農学系の研究強化
- 環境放射能研究所、発酵醸造研究所、水素エネルギー総合研究所等の研究を進化・発展

地域社会との連携

- 地方国立大学の社会貢献の在り方を再構築・強化
- 研究者が問題解決に関わる地域貢献の実践研究を設計
- 将来の地域の姿や課題を明確化し、逆算して課題を提起

教員養成・附属学校園改革

- 震災・原発事故復興と少子化に対応した教員養成の福島モデルを構築
- 少子化を考慮した附属学校園の抜本的改革を実施

地域に即したグローバル教育を全学で推進

- Fukushima Ambassadors Programを発展させ、地域に即したグローバル教育を全学で推進
- 留学生増加、語学力向上、海外インターンシップ活性化
- 海外との共同研究数の増加

学士課程改革

本ページに記載の学士課程改革の構想は、今後、文部科学省等関係者と調整の上、令和8年度に文部科学省大学設置・学校法人審議会の審査を受ける予定です。
なお、構想は審査結果によって確定するものであり、変更の可能性があります。

令和9(2027)年度 3学群5学類から 4学部になります。

人文社会学群	人間発達文化学類(260名)	教育学部	学校教育教員養成課程(仮称)	(235名)
	行政政策学類 [*] (205名)			
	経済経営学類(220名)			
理工学群	共生システム理工学類(200名)	政経学部	政経学科(仮称)	(400名)
農学群	食農学類(100名)	理工学部	共生システム理工学科(仮称)	(215名)
		食農学部	食農学科(仮称)	(135名)

※夜間主は廃止されます。

福島大学学士課程の全体像



政経学部

(仮称)

行政政策学類と経済経営学類が統合し、
現代の地域社会にイノベーションを
もたらす人材を育成する学部へ

政経学部設置準備室副室長
行政政策学類長
今西 一男 教授

学長
佐野 孝治 教授

政経学部設置準備室長
経済経営学類長
熊沢 透 教授

政経学部が 目指すもの

VUCAと呼ばれる不確実な時代において、福島大学は法人化や震災対応で得た知見を基盤とし、人口減少をはじめとする次の課題解決へ向けた取り組みを進めています。

政経学部では地域経済・地域社会の持続可能な発展とWell-being社会の実現に貢献するため「社会実装力」を持つ人材を育成します。

社会実装力 とは

社会実装力とは、世の中で実際に役立つものを生み出すことのできる力のことです。それは様々なハードウェアやアプリケーションに限ったことではありません。地域社会や組織のなかで機能する「しくみ」を構築すること含まれます。そのしくみがそして、人類のWell-beingのために——社会と人びとの暮らしにおける困難や不安を軽減するために——役に立つことが大切です。

コースと 人材育成

社会実装力を身につけるため特色ある3コースを用意しています。

産業・地域社会イノベーションコース
地域資源や新技術を活用し新しい価値を創造する

経済経営コース
地域企業の新陳代謝をけん引し地域経済を再構築する

公共デザインコース
公的な視点で新しい社会の姿をデザインし伴走する



〈社会実装の実例〉

◀大学構内へ「路線バス運行」
地域公共交通の利用促進のための政策提案を行い、その一つとして大学構内へ路線バスが運行されることになりました。路線バス乗り入れ開始に伴い、バスの現在位置や遅延情報をリアルタイムで表示するバス運行情報デジタルサイネージを独自に開発し「技術による利便性向上」とバスの乗り方教室の開催やラッピングバスの運行など「活動による意識変容」を組み合わせた多角的なアプローチを行い、キャンパスへのアクセス性向上と地域公共交通の維持・活性化に大きく寄与しています。

2つの学類が統合し、新設された政経学部(仮称)。その目的や目標、特色について、佐野孝治 学長、熊沢透 政経学部設置準備室長、今西一男 政経学部設置準備室副室長に聞きました。

「社会実装力」を身につけ、 地域や産業の未来を創る

詳しくは37ページへ



これからの未来へ向けて君はここで進化する

福島大学研究最新動向

Faculty of Education

教育学部 (仮称)

英語学習者の個人差と認知プロセスに関する研究 —量的データと視線計測データに基づくアプローチ—

高木 修一 准教授

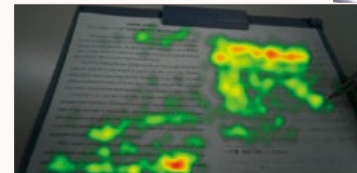
まず、英語学習者の個人差に関わる要因として、外国語読解不安とワーキングメモリについて共同研究を行っています。外国語読解不安については、日本人大学生を対象とした一連の研究を通して、読解熟達度および授業成績に対する負の影響を明らかにしました。つまり、英語での読解に不安を感じる人は、英語力が低くなったり、英語の授業の成績が悪くなったりする傾向にあるということです。これらの研究成果は国際ジャーナルに論文として掲載されています。ワーキングメモリについては、日本人小学生の音韻認識と音声産出の特徴に関する検証を行った研究で、小学校英語教育学会の学会賞(研究論文)を受賞しています。さらに、日本人小学生用のワーキングメモリの機能を測定する英語リスニングスパンテストを開発した研究により、全国英語教育学会の学術奨励賞を受賞しました。開発したテストはWeb上で実施できるようになっており【1】、現在はこのテストを用いて継続的に研究を行っています。

次に、英語学習者の認知プロセスとして、認知心理学や言語テスト学の観点から研究を進めています。ここでは、直近に行った個人研究を紹介します。日本人大学生の英文要約課題における解答言語の違いについて、視線計測データを用いて検証を行いました。視線計測用の眼鏡を装着した上で、日本人大学生に2つの英文を読んでもらった後に、日本語または英語にてそれぞれの英文の要約を書いてもらいました【2】。解答プロセスを英文読解・要約作成・要約作成後の見直しの3段階に分け、英文または解答部に対する固視時間の割合を比較しました。その結果、作成後の見直しのプロセスにおいて、日本語で解答する場合は英文と解答部を同じ割合で見るとに対して、英語で解答する場合は解答部を見る割合が高かった【3】ことが明らかになりました。つまり、解答言語が異なっても要約作成までのプロセスに違いはありませんが、作成後に学習者が注意を向ける範囲が異なることがわかりました。この研究は国際学会で発表しており、現在は論文として執筆中です。

【1】英語ワーキングメモリの容量を測定するWeb上のテスト



【3】収集した視線計測データの分析事例



【2】視線計測データを収集する実験の様子



Faculty of Economics and Social Sciences

政経学部 (仮称)

「ガソリン補助金は損失が大きい」 経済政策の効果を分析

佐藤 英司 准教授

佐藤英司研究室では、経済学とデータから経済政策の効果を分析しています。最近の研究では、2022年1月から2024年3月までの日本のガソリン補助金を対象に、政策効果を検証しました。需要と供給の考え方とデータを用いて、「もし補助金なかった場合」の価格・消費量(反実仮想)を推定したところ、補助金により価格は1リットルあたり約24円下がり、消費量は月あたり約8万リットル増えたことがわかりました。

一見すると「安くなって良い政策」に見えますが、財源は税金で社会全体の負担です。さらに消費増はCO₂排出や大気汚染、交通事故、渋滞などの社会的コストを増やします。これらも含めて評価すると、ガソリン補助金は社会全体では損失の方が大きいことが示されました。

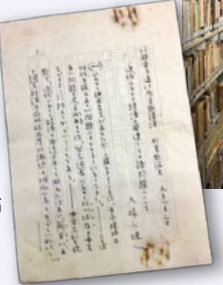


附属図書館「大塚久雄文庫」から 戦後日本の社会科学を支えた思想を読み解く

阪本 尚文 准教授

福島大学には、戦後日本の社会科学がどのように生まれ、発展してきたのかを考えるうえで欠かせない貴重な資料が数多く集められています。附属図書館「大塚久雄文庫」には、20世紀日本を代表するイギリス経済史家、大塚久雄の蔵書、草稿、そして書簡が所蔵されています。さらに、同図書館には、大塚理論から出発し、日本の経済学史研究を国際的水準へと高めた小林昇の福島時代(1940~50年代)の日記や講義ノート、さらに、大塚の盟友であったフランス革命史家、高橋幸八郎の戦時期およびフランス留学中の書簡や日記も寄贈されました。これらの資料を通して、戦後日本の社会科学を支えた思想と、その形成の歩みを読み解いています。

大塚の講演草稿
(阪本撮影)



福島大学「大塚久雄文庫」
(阪本撮影)



変化が当たり前となった社会で、私たちが向き合う課題はますます多様化しています。
正解のない現代で、福大が取り組む研究の最前線をご紹介します。

Faculty of Science and Engineering

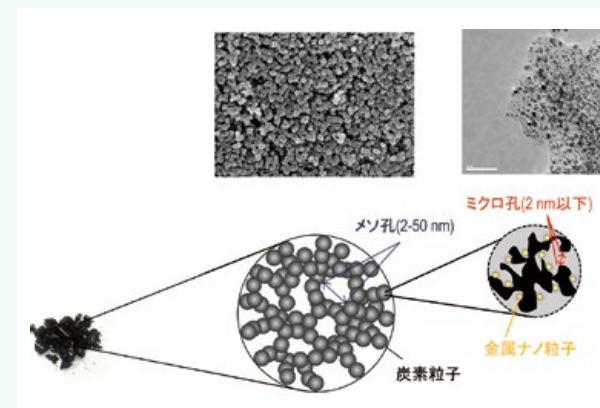
理工学部 (仮称)

水素エネルギー社会を支える 多孔質炭素材料の開発

岩村 振一郎 准教授

再生可能エネルギーを社会で広く活用していくためには、水素の利用が重要な役割を担うと考えられています。太陽光や風力などの再生可能エネルギー発電による電力を利用して水を分解し水素を製造する技術や、水素を燃料として電気を取り出す燃料電池などは、クリーンエネルギー社会の実現に向けた重要な技術です。これらの装置では、水素生成反応や酸素還元反応などを効率よく進めるために電極触媒が不可欠です。多くの場合、白金などの貴金属触媒が用いられますが、これらは非常に高価であるため、少ない量で高い性能を発揮させることが求められます。そのため、触媒の表面積を大きくすることや電極内に導電パスを形成する目的で、貴金属触媒を炭素材料の表面に担持する方法が広く用いられています。炭素材料の細孔構造や表面状態などは、電極触媒の性能や耐久性に大きな影響を与えます。また、実際のエネルギーデバイスとして社会に普及させるためには、単に高性能であるだけでなく、大量に製造できることや低コストであることも重要な条件となります。

私たちは、このような背景のもとで炭素材料の開発に取り組んでいます。特に、電極触媒の担体として利用できる多孔質炭素材料を、簡便な方法で合成する研究を進めています。多孔質炭素とは、内部に1~100nm程度(1nmは1mmの100万分の1)の微細な孔が多数存在する炭素材料であり、非常に大きな表面積を持つことが特徴です。この微細な孔の中に触媒作用を示す金属ナノ粒子を導入することで、電極触媒として利用できる材料を作ることができます。私たちの研究では、細孔サイズを金属触媒の担持に最適な大きさに制御して作り分けることが可能です。さらに、炭素の表面状態を制御することで、金属粒子との相互作用や電極の耐久性を向上させることもできます。こうした材料設計を通じて、少ない貴金属量でも高い性能と耐久性を示す電極触媒の開発を目指しています。



多孔質炭素と金属ナノ粒子の複合体の構造と電子顕微鏡写真

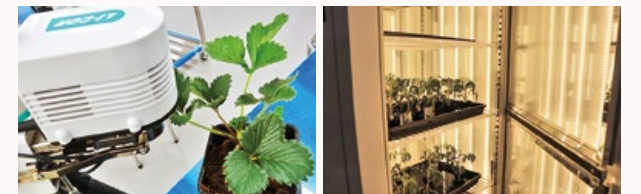
Faculty of Food and Agricultural Sciences

食農学部 (仮称)

植物の応答のしくみを手がかりにした 極端気象に負けない栽培技術の開発

深山 陽子 教授

野菜・花き研究室では、近年多発する猛暑・乾燥・豪雨などの極端気象に対応できる栽培技術の開発を進めています。植物が環境の変化にどう応答し、体内の水分動態がどのように変わるのかを最新の計測技術と解析手法を用いて明らかにすることが研究の柱です。こうした植物の環境応答メカニズムを基に、生理障害を抑え、野菜や花の安定生産を可能にする栽培技術の確立を目指しています。さらに、野菜の美味しさを引き出し、消費者により良い品質を届けるとともに、生産者の収益向上にもつなげる環境制御法についても研究を進めています。



地域の農業を支えるしくみの未来 —日本型コモンズとしての 農業水利システムから考える—

高野 真広 講師

かんがい(農業を営むうえで欠かせない「水」の安定的な供給)を支える日本の農業水利システムは、地域社会の共同によって成り立つ「日本型コモンズ」の典型例です。コミュニティ単位の管理を基盤に、土地改良区を中心に維持管理が行われてきました。しかし、農村地域の過疎化・高齢化・混住化や農業経営の多様化、施設の老朽化などを背景に、いま大きな転換点を迎えています。次世代の地域資源管理のあり方を考えるために、技術・管理体制と水管理の効率性に関する実証分析や、土地改良事業が農業構造・地域社会に与える影響の統計的分析を行っています。



F-REI での研究

F-REI とは？

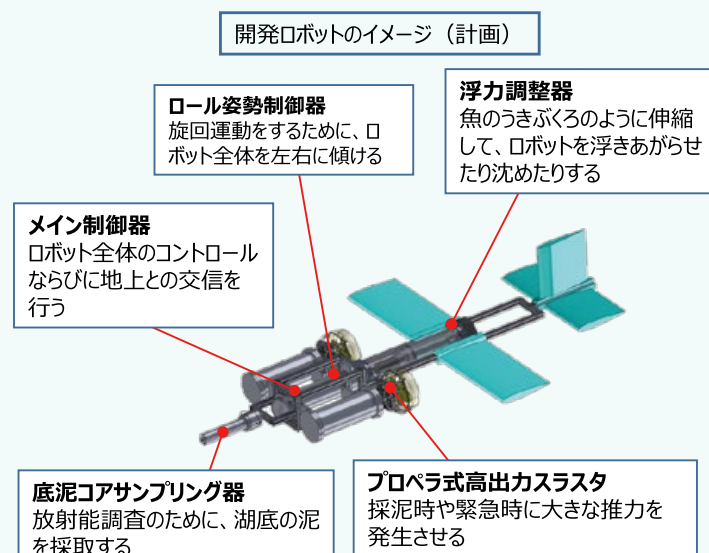
F-REIは、Fukushima Institute for Research, Education and Innovation (福島国際研究教育機構) の略で、東北の復興と日本の科学技術強化を目指す特殊法人です。東日本大震災や原発事故を経験した地域だからこそ取り組める研究を行い、福島・東北の復興に結びつけていきます。福島大学はF-REIと連携協定を結び、共に最先端の研究を進めています。

福島大学で研究している事業を紹介します！

環境放射能動態調査のための水中ロボットの開発とその応用に関する研究

研究分野 第1分野 (ロボット)
研究代表者 共生システム理工学類 教授 高橋 隆行

事業内容
東京電力福島第一原子力発電所事故に起因する環境放射能の動態研究への応用を主として想定し、水深100m程度、淡水での底泥コアサンプリングを行うことのできる水中ロボットシステムを開発する。このシステムは、遠隔操作ロボットと自律航行ロボットの2種類のロボットから構成され、さまざまな調査形態に柔軟に対応することを目標にしている。
具体的な調査対象として、大柿ダム (請戸川) ならびに猪苗代湖を想定して開発を進めている。



土壌低分子有機物の植物栄養学的影響の解明

研究分野 第2分野 (農林水産業)
研究代表者 食農学類附属発酵醸造研究所 特任講師 菅波 真央

事業内容
化成肥料削減と有機農業転換が求められる中、有機肥料の効果を科学的に解明し、再現性ある技術として確立することが課題である。本研究は、有機肥料独自の効果に着目し、作物生育に効果のある有機成分を特定し、その機能性有機成分を供給する栽培技術の基盤構築を目指す。また、地力利用型品種育成に向けて、窒素利用効率の高い品種の選抜とその遺伝要因の解明に取り組む。



果菜類収穫作業の軽労化につながる協働ロボットの開発および新たな協調作業体系の構築

研究分野 第2分野 (農林水産業)
研究代表者 食農学類 准教授 窪田 陽介

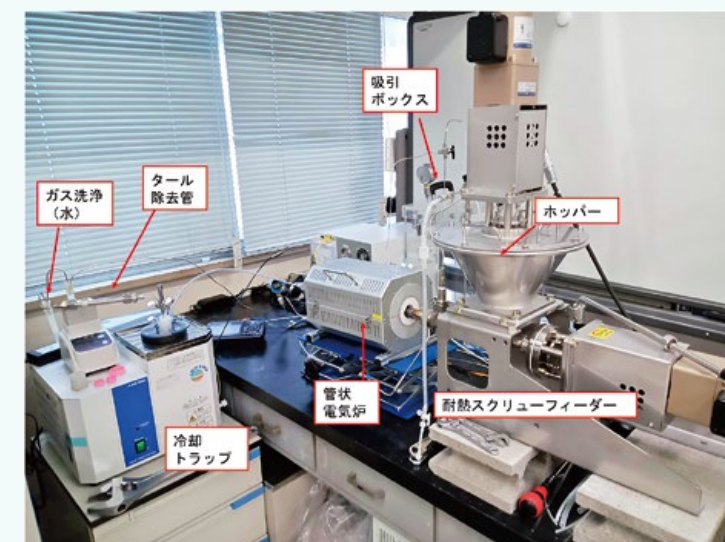
事業内容
ピーマンの露地栽培における収穫作業について、作業姿勢や心拍指数から作業負担を評価し、収穫ロボット導入による協調作業体系の構築による負荷軽減の方策について検討する。その方策を踏まえて、露地栽培におけるピーマンの選択自動収穫を実現する新たな要素技術の開発と収穫ロボットの設計・製作を行う。また、本研究で作成するピーマン植物体モデルを配置した限定環境下において、年間を通したロボット性能評価試験の実施が可能となり、露地栽培における収穫ロボットに適した新しい栽培方法、環境、作業体系を構築する。



浜通り地域の資源を活用した高効率・循環型ネガティブエミッション・地産地消システム

研究分野 第3分野 (エネルギー)
研究代表者 共生システム理工学類 教授 浅田 隆志

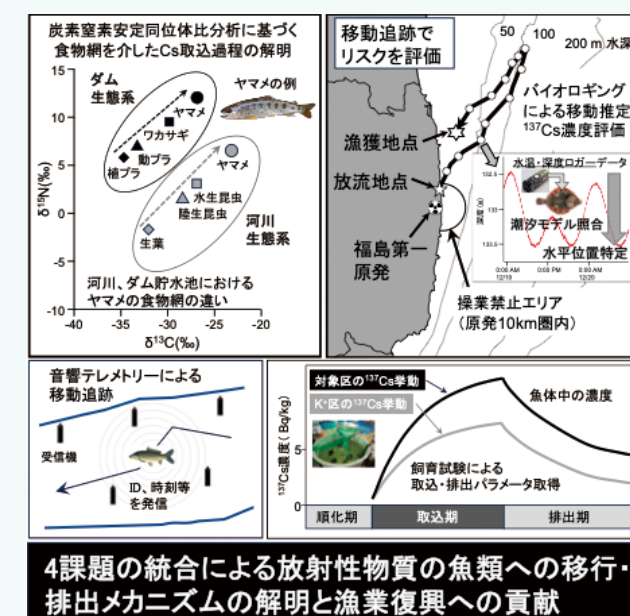
事業内容
未利用材等のバイオマスの炭化プロセスにおいて生成する水素や一酸化炭素等の可燃ガスを燃料としてガスエンジン等を用いて熱電供給するエネルギー利用システムを開発し、さらに、炭化プロセスにおいて同時に製造されるバイオ炭を農地施用することにより炭素貯留するネガティブエミッション技術を構築する。



福島県の淡水域及び沿岸域における魚類への放射性セシウム移行評価

研究分野 第5分野 (原子力災害に関するデータや知見の集積・発信)
研究代表者 環境放射能研究所 教授 和田 敏裕

事業内容
原発事故からの時間経過とともに、放射性セシウムの基準値 (100Bq/kg) を超える水産物の割合は低下している。一方、原発周辺の水域に生息する一部の魚類では、基準値を超える事例も報告されている。本事業では、原子力災害に関するデータや知見の集積・発信の一環として、放射性物質の魚類 (淡水魚および海水魚) への移行を多面的なアプローチで解明することにより、水産物の安全性評価などに必要となる科学的な知見を整理する。



変化の時代に進化で挑む 福大だからできる 8 つのこと

カリキュラムの特色

福島大学では、新たな社会のあり方を提案できるイノベーション人材を育成するため、地域での学びやそこから得たデータを分析する能力、成果を世界へ発信する語学力に力を入れています。
未来をつくるのは、皆さん一人ひとりです。
自分に何ができるのか。地域や世界で、どんな未来を進化させていくのか。
本学でともに考え、学んでいきましょう。

1

入学から卒業までを教職員が手厚くサポート

入学前教育から入学後のサポート、授業・学修、サークルやボランティア活動、留学などの各種プログラム、就職支援、そして卒業研究に至るまで、4年間の学生生活を一貫した体制で支援することで、目標に向かって意欲的に学び、さまざまな活動にチャレンジできるよう大学生活をサポートします。



2

情報社会のデータ活用術を身につける 「データサイエンス実践教育」

学内外の多様な情報を収集・分析し、その成果をプレゼンテーションする一連のプロセスを実践することで、これからの時代に求められる情報読解力・表現力・数量的思考といった基礎リテラシーを、体系的かつ着実に身につけます。

→ くわしくは16ページ



3

問題探究能力を育成する独自の「初年次教育」

「アカデミックスキルズ科目」「ライフマネジメント関連科目」「外国語科目」「教養科目」から構成される基盤教育を学ぶことにより、高校までの学びを大学での学修へと円滑につなげるとともに、現代社会が抱える諸問題を多面的、主体的に考える能力を身につけます。



4

地域で学び、課題の解決を考える

「地域実践教育」

本学では、地域実践教育の「ふくしま未来学入門」や「むらの大学」を中心に、地域が抱える課題について学ぶ機会を拡充しています。地域の現状に触れ、実際に地域で活動する学修を重ねることで、学生の問題探究力や問題解決力を育成します。

→ くわしくは17ページ



5

学部間を越えて知識を追究する「共創知教育」

「共創知教育」は、学部・コースの専門領域を越えて「+αの専門性」を身につけるための教育体系です。学術と実践、地域と学生、学部と専門分野を横断する“協働”によって、新しい知見と実行力を生み出し、学生の専門性を深化、重層化、実装化します。

→ くわしくは19ページ



6

福島大学ならではの挑戦「C1 Project」

本学では、英語力を極めることを目的に、学部横断的に参加できる「C1 Project」を実施しています。活動を通して磨かれる高度な言語スキルと、成果を積み重ねる中で育まれる自信を原動力に、自らの可能性を広げ、既存の枠組みにとられない未来を切り拓くことができます。

→ くわしくは23ページ



7

身につけた力を「見える化」

科目や科目群ごとに学修目標を明示し、どの能力を伸ばすのか、またどのように成長したのかを情報技術を活用して「見える化」しています。さらに、アクティブ・ラーニングや実践的な学修を取り入れることで、学生の学びを一層活性化させます。



8

キャリア教育を充実し、就職を強力に支援

本学が先進的に取り組んできたキャリア教育を、キャリアセンターを中心に、自治体や企業との連携を強化し、さらに発展させます。インターンシップの機会やキャリア支援を充実させ、学生が自らライフプランを考え、より納得度の高い就職ができるようサポートし、社会で活躍できる人材を育てていきます。

→ くわしくは85ページ



4年間の学びを確実に深め、イノベーション人材を育む

教育体系

本学では高校までの学びと大学での学修をつなぐ「基盤教育」を充実させています。大学で学ぶ上で必要な基礎能力を身につける「アカデミックスキルズ科目」と「外国語科目」、自らの心身の状態を適切に保ち、人生を主体的に考える「ライフマネジメント関連科目」、現代社会が抱える諸問題を多面的、主体的、客観的に考える「教養科目」の4つの科目群を設定し、現状を分析し問題解決へとつなげるための能力を育みます。

基盤教育の深まりとともに、自分が選択したコースの知識を深める「専門教育」や語学力を高める「グローバル特修プログラム」、地域に学びその知見データを分析する「地域×実践教育プログラム」、学部間の垣根を越えて学ぶ「共創知教育」などで学び、「正解のない問い」にチャレンジできるイノベーション能力を育んでいきます。

1年	2年	3年	4年
基盤教育			
専門教育			
共創知教育			
グローバル特修プログラム			
地域×データ実践教育プログラム			



地域×データ実践教育プログラム



全学を対象とする「地域×データ実践教育プログラム」では、地域に根ざした学びとデータにもとづく分析を、幅広く修得します。「基盤教育科目」と「学部専門教育科目」とを組み合わせ、本学の特徴ともいえる「正解のない問い」にチャレンジする学生を育成する特修プログラムです。

本プログラムでは、“ふくしま未来学入門”“むらの大学”などの「地域実践教育」と“データサイエンス実践演習”などの「データサイエンス実践教育」を掛け合わせ、地域へのかかわりを基礎として、課題を科学的に捉え、その解決に向けた主体的な取り組みができる個人の育成を目指します。

なお、本プログラム対象科目を履修し、必要な単位数を取得した学生に対しては、大学卒業時にプログラム修了を認定します。

地域実践教育

被災地域へのフィールドワークを中心に「現場に根ざしながら地域課題を発見・分析・解決する力」を養う



データサイエンス実践教育

「地域におけるEBPM (Evidence Based Policy Making 証拠に基づく政策立案)」に関する知識・技能を養う

地域の課題解決をけん引する人材の育成

「地域×データ」実践教育プログラム履修基準表

領域	開設科目等	必修	要認定単位数
基盤教育	社会とデータ科学の基礎	2	12
	「地域×データ」実践教育プログラム科目	—	
	スタートアップセミナーⅡ	2	
	ふくしま未来学入門Ⅰ・Ⅱ	2	
	むらの大学Ⅰ・Ⅱ	—	
	データ分析入門、福島の地域データ、データサイエンス実践演習	—	
	EBPM入門、地域課題と探究指導、地域課題とビジネス、地方と若者	—	
専門教育	自主学修プログラム(地域実践)	—	12
	2年前期ゼミ	2	
上記の基盤教育または専門教育から			6
「地域×データ」実践教育プログラム修了認定に必要な単位合計			30

※履修基準・開設科目などは学修効果向上等のため変更される場合があります。

情報社会に必須となるデータ活用術を身につける

データサイエンス実践教育

現代の社会において数理・データサイエンス・AIは世界の共通知識になりつつあります。数理・データサイエンス・AIに関する知識やスキルは、さまざまな学問を学ぶ上でも、将来の職業生活においても非常に重要です。

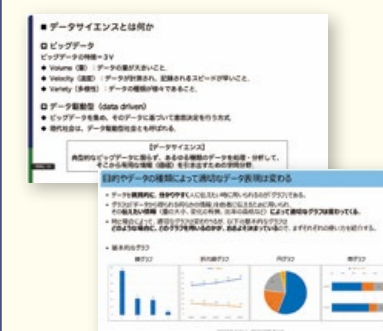
福島大学では、全学で基礎から実践へと積み上げ式にデータ分析能力を学んでいく「『正解のない問い』に挑むデータサイエンス教育プログラム(リテラシーレベル)」を構成する3科目を中心としながら、学生の興味関心に応じたデータサイエンス実践教育を展開しています。また、さらに発展的な学修の機会として学部ごとに「『正解のない問い』に挑むデータサイエンス教育プログラム(応用基礎)」も設置しています。



「『正解のない問い』に挑むデータサイエンス教育プログラム」は、数理的思考力などを体系的に学ぶ教育プログラムとして、文部科学省の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」に認定されています。



社会とデータ科学の基礎 (全学年必修科目)



調査の方法論やデータサイエンス・AIの応用事例を通してデータを構築したり、データの特性に応じた適切な分析を行ったりするために必要なデータサイエンスの考え方やスキルを学びます。

質的・量的調査の基礎を学修できるほか、学生の専門分野に応じて各学部で数理・データサイエンス・AIの応用事例に関する講義を開講しています。

データ分析入門 (全学年選択科目)



科学的方法の基本原則を学んだ上で、実際に自分で福島県に関するデータなどを用いてデータを可視化・分析します。Excelなどの表計算ソフト・統計ソフトを用いてデータの集計や加工の練習を行うとともに、演習形式で調査やデータ分析について経験的に学びます。また、質的・量的データの扱い方、データの代表値や2つの変数の関係の分析といった統計分析の第一歩となる基本事項についても学修します。

データサイエンス実践演習 (2・3・4年選択科目)



データサイエンティストに求められる基礎スキルとビジネス現場でのデータサイエンス・AIの活用事例を学び、データ分析を活用した政策への課題解決・提言の一連の流れを経験し、理解を深める授業です。

福島県内の自治体から実際のデータを提供していただき、地域の課題解決に向けた一連のプロセスをプロジェクト型学習の形で学びます。

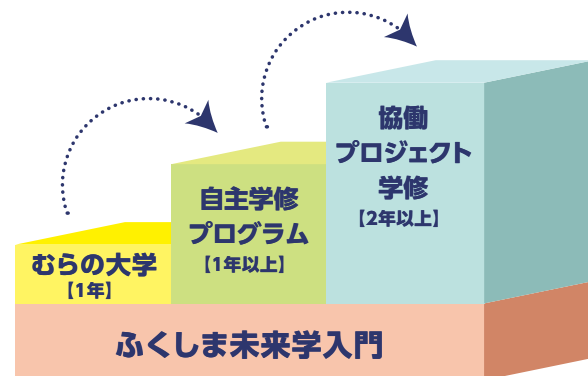


上記以外にも、データから地域を学べる多彩な科目を開講しています。学生それぞれの関心に応じた多様な科目を、地域における実践を重視した内容で展開していきます。

- 福島の地域データ(全学年・前期)
- 地方と若者(全学年・前期)
- EBPM入門(2年以上・前期)
- 地域課題とビジネス(2年以上・前期)
- 地域課題と探究指導(2年以上・夏季集中)

地域実践教育

福島大学では、地域に根ざしたプロジェクト学習を体験できる地域実践教育を数多く用意しています。多彩な視点で福島の「いま」と「これから」を学ぶ講義「ふくしま未来学入門Ⅰ・Ⅱ」では、基礎を幅広く学ぶことができます。より実践的な力を身につけたい学生は、フィールドワークを中心とした「むらの大学Ⅰ・Ⅱ」や「自主学修プログラム」「協働プロジェクト学修」などを受講することで、地域課題に主体的に取り組む力を修得できます。いずれも全ての学部から受講できます。



ふくしま未来学入門Ⅰ・Ⅱ

選択科目

ふくしま未来学入門は、東日本大震災と福島第一原発事故が地域の人々におよぼした影響や、復興に向けた取り組みについて学ぶ講義です。

文理を超えた教授陣によるオムニバス講義「ふくしま未来学入門Ⅰ」では、学問知が実践知としてどう活用されているかを学びます。復興の現場で活躍されている方々を講師としてお招きする「ふくしま未来学入門Ⅱ」では、多様なテーマ・視点を通して地域再生の歩みの一端に触れることで、課題解決型の思考を養います。

ふくしま未来学入門で学ぶ基礎知識は、現地へ実際に足を運ぶフィールドワークなどを行う際の重要な土台となります。

南相馬市とジェンダーの課題



「ふくしま未来学」への招待①

ふくしま未来学入門Ⅰ 第1回・ガイダンス



かつて双葉町中心部に掲げられていた「原子力 明るい未来の エネルギー」の看板の写真 (東日本大震災・原子力災害伝承館)



授業だけが学びじゃない！ 地域の現状を知る日帰りスタディツアー

みらいバス

地域と大学をつなぐ「みらいバス」は、学生・教職員を対象とした日帰りのスタディツアーです（参加費は原則無料）。授業以外で地域を訪問するきっかけをつくるため、年間10回程度実施しています。被災地域の訪問・見学やボランティア活動を通じ、それぞれの地域の現状を学びます。

主な行き先

- 東日本大震災・原子力災害伝承館（双葉郡双葉町）
 - 震災遺構浪江町立請戸小学校（双葉郡浪江町）
 - 大野駅および周辺市街地、中間貯蔵施設（双葉郡大熊町）
- など



むらの大学Ⅰ・Ⅱ

1年選択科目

震災と原発事故により避難を余儀なくされ、復興と地域再生に取り組む地域（川内村・南相馬市小高区・大熊町・飯館村）にくりかえし訪れ、地域住民の方々へのインタビューや交流を行うフィールドワーク型の授業です。

前期には現地を実際に訪れ地域について学ぶ「むらの大学Ⅰ」が、後期には住民の方々へインタビューして生活史を編む「むらの大学Ⅱ」が開講されます。

主な活動

- ◆ 住民の方々からお話を伺い、記録に残すアーカイブ活動
- ◆ 地域イベントのお手伝い



むらの大学アーカイブ

「むらの大学」の授業で、学生たちは地域住民の方にインタビューを行い、記録をまとめた小冊子を作成します。原稿の編集作業や追加取材、ご本人への確認なども全て学生たちの手で実施します。

インタビュー全文はホームページにアーカイブとして公開しています。



詳しくはこちら



自主学修プログラム

全学年選択科目

学生が被災地で課題を発見し、自主的に復興に取り組むプロジェクト学修です。文系・理系の全学部が1つのキャンパスに集まる総合大学の強みを活かし、異なる専門性を持つ学生と協働しながら課題解決を図ることで、実践的な力を身につけます。

主な活動

- ◆ 地域に根差した持続可能な農業のあり方を考える
 - ◆ 祭礼やイベントの支援活動とアンケート分析
 - ◆ 地域の子ども食堂の運営サポート
- など

協働プロジェクト学修

2・3・4年選択科目

担当教員がフィールド（川内村、大熊町、南相馬市、飯館村など）と課題を設定し、指導や助言を適宜与えながら、学生たちが自主的に被災地の復興プロジェクトに取り組むプロジェクト学修です。学部の枠を超えた「活動を通じた学び（サービス・ラーニング）」により、専門性や地域問題の解決能力、他の専門性を有するメンバーとの協働力・学際性などを養います。

プロジェクト例

- ◆ 地域の特産品を使った六次化商品の開発
 - ◆ 福島を世界とつなげる！ Fブリッジプログラム
 - ◆ 除染土処分に関する学生ワークショップ開催
 - ◆ 避難を経験した地域の教育環境を考える
- など



きょう そう ち

共創知教育

▶ 福島大学が目指す「正解のない学び」

大学で学ぶことの意味って、何でしょう？

- 大好きな宇宙について知りたい！
- 日本の古典文学を深く読み取りたい！
- 会計士の資格を取って、あるいは教師の免許を取って、働きたい！

いろいろな期待を持ってみなさんは大学に進学したいと思っていますし、そのどれも大事な意味があります。

学んで「わかる」という経験は楽しいことです。専門について深く学びたい、というのは大事なことです。また、大学に来ないと取得できない資格や免許を取得する、というのみなさんの目指す進路の実現にとって必要なことです。

大学には近年、それに加えて、「社会の課題を解決する」人材を養成する、ということが期待されるようになってきました。たとえば環境問題など、地球規模から地域までの多様なレベルで複雑化・深刻化している課題を見つけ出し、それを解決するための学問の力が必要とされています。今は高校でも探究活動が活発化していますから、それを思い出してもらえればイメージしやすいかもしれません。

福島大学は、課題を発見し、社会と協働してそれを解決することを目指すことを大学での学修の目的とし、

「正解のない問い」に挑む力を育てる！

ことをスローガンとしています。

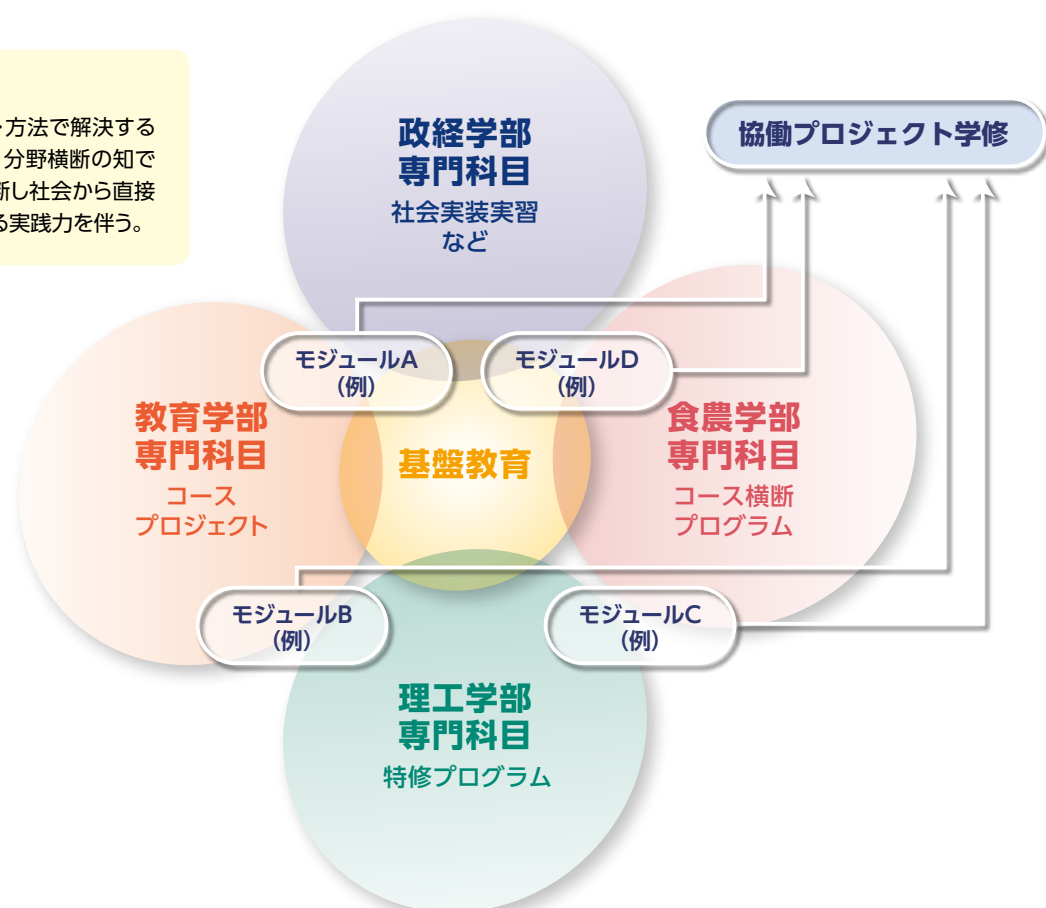
▶ 専門教育と共創知教育

大学のカリキュラムには、大学での学びの基礎となる「基盤教育」と学部での「専門教育」がありますが、前の項で説明した内容を追究するために、基盤教育や専門教育に重なる形で、あるいははみ出す形で、「共創知教育」を設定しました。

社会課題を解決するためには、さまざま異なる専門についての学問的知見が必要な場合が多いと考えられます。それに対応し、複数の学問領域にわたる学びを行うカリキュラムを設定したのがこの共創知教育です。

【共創知とは】

課題を多様な視点・方法で解決するための、文理融合、分野横断の知であり、学内外を縦断し社会から直接学び直接働きかける実践力を伴う。



▶ 学部における共創知教育

まず、学部の中で系やコースなどの専門教育を横断する形で「共創知教育」が組み込まれています。これらは学部によって卒業のための単位に組み込まれている場合（必修）も、そうでない場合（選択）もあります。学部ごとに示すと次のようになります。

教育学部
(仮称)

「コースプロジェクト」で行われる探究的な学びがそれにあたります。



政経学部
(仮称)

「社会実装実習」によるコース横断的な学びがそれにあたります。



理工学部
(仮称)

3つの特修プログラムがコース横断的に履修できます。



食農学部
(仮称)

6つのコース横断プログラムによる融合的な学びがそれにあたります。



▶ 学部を越えた共創知教育 (モジュールと協働プロジェクト学修)

現代社会に必要な問題意識や知識、技術に関わる授業を、各学部の専門科目や基盤教育科目にまたがるかたちで複数セットした科目群 (モジュールと呼びます) を履修することによって、「+αの専門性」を身につけることができる仕組みを作っています。

8単位程度のモジュールが多く設定されていますから、興味にあうものをぜひ探してみてください。履修した単位は、それぞれ、専門教育や基盤教育、あるいは自由選択科目にカウントすることができますので、卒業に必要な単位数 (124単位) に含めることが可能です (履修の仕方によっては124単位を超えることがあります。また、卒業のための履修基準表のどこに

位置付くかは一人ひとりで異なりますから、注意が必要です)。モジュールを履修すれば「デジタルバッジ」が発行されます。就職活動などで対外的な証明に利用できます。

また、モジュールを履修した上で、さらにその知識や技術を社会に応用してみたい、と考えることもあるかもしれません。そのような場合は「協働プロジェクト学修」に発展させることができます。担当教員が呼びかける場合もあれば、学生が主体的に作っていくことも可能な仕組みになっています (その場合も担当教員はつきます)。社会の実際の課題を発見し、その解決に取り組み、大学での発表会でその成果を披露してもらいます。

国際交流

福島大学は、地域に根ざしたグローバル教育を推進しています。
多彩な国際交流で異文化理解を育む機会を提供するとともに、語学力強化のための先進的な取り組みを展開しており、
変化する世界に主体的に挑戦し、新たな可能性を切り拓く人材の育成に努めています。



バディ制度 期間／数日～6カ月程度

海外に留学してみたいけど不安がある。身近な場所で語学力を試したい。そんな皆さんが活躍できるよう、福島大学には外国人留学生のサポートをする「バディ制度」があります。バディ（友人）として留学生と関わることで、彼らの文化を直接感じ、福島にいながら異文化交流ができます。グローバル人材へのファーストステップとして貴重な経験となることでしょう。



- バディの活動**
- 1 渡日前後のサポート**
福島駅での出迎えをはじめ、市役所や銀行などの手続きのサポートを行います。
 - 2 大学生活のサポート**
キャンパスの案内や履修相談など、留学生生活を楽しく過ごすためのお手伝いをします。
 - 3 良き友人として**
お互いの言語を学び合ったりする中で、福島や日本の良さを伝えます。

交換留学 期間／半年または1年

福島大学では大学間交流協定に基づき、海外の38大学と学生交流協定を締結しています。「交換留学」とは協定締結大学への長期留学で、福島大学のみに学費を納めるだけで海外の協定締結大学で学ぶことができます。国際交流センターが留学先との調整役を務めるので、留学の準備から留学中の相談、帰国後の単位の互換まで、さまざまな手続きも安心して行うことができます。



短期研修 期間／10日～5週間

夏季または春季短期研修では、海外の協定締結大学で語学を学びつつ、フィールドワークや文化体験にも参加できます。韓国、中国、台湾、カナダ、オーストラリア等での語学研修など、多彩なプログラムが用意されています。



交換留学 経験者の声

留学を通してどんなことにも挑戦できる
自分の人生の可能性に気づきました



経済経営学類
経済コース 4年
すうい
徐 蔚さん
埼玉県立春日部女子高等学校出身

▶留学先／ルール大学ボーフム【ドイツ】
▶期間／2025年9月～2026年2月（半年間）

私が留学したルール大学ボーフムは、留学生向けの講義もあり、寮への斡旋もあるなどサポート体制が充実しています。ドイツ語の他に英語で行われる講義もあり、私はそれを受講しました。4年次後期からの交換留学では、福島大学で卒業に必要な単位はほとんど満たしていたため、自分の興味や関心に合わせて、受けた講義を中心に履修することができました。単位取得の難易度は高く、留学生だけでなく一般のドイツ人学生も、講義に真剣に取り組んでいるのがよい刺激になりました。また、福島大学と同じようにバディ制度があり、町の案内などのサポートしてくれたのが心強かったです。中でもいろいろな町のクリスマスマーケットを訪れたのは、よい思い出になりました。

留学前は「こうしなければならない」という固定観念が自分の中にありましたが、留学を通して「意見の違いは当たり前」「常にオープンマインドでいることが大事」ということを実感し、新しいことに挑戦するハードルが下がったと感じています。これから就職という節目を迎えますが、自分がどうしたいかを大切に、今後の自分の人生を歩んでいきたいと思っています。



ドルトムントのクリスマスマーケット。5階建てのビルと同じ高さというツリーに圧倒されました



ヨーロッパ留学生団体「エラスムス」が主催するベルギー旅行では、差別に反対するデモ行進に参加しました

短期語学研修 経験者の声

楽しく有意義だった語学研修
学びと経験を次の留学に活かしたい



人間発達文化学類
人文科学コース 3年
小林 詞音さん
宮城県宮城第一高等学校出身

▶留学先／マクマスター大学【カナダ】
▶期間／2025年8月9日～2025年8月23日（2週間）

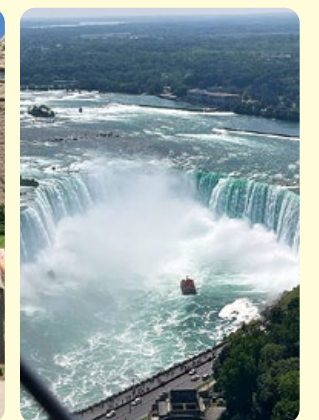
大学の夏休みを利用してカナダのマクマスター大学に語学研修に行きました。研修には日本と中国から3大学が参加し、総勢30名ほどで大学が用意したプログラムに沿って学びました。

平日のプログラムは大学内での英語の講義です。午前中は文法を学び、午後は討論やゲームなどでコミュニケーションを育みます。最初はネイティブ相手に自分の英語が通じるのか不安でしたが、伝わると嬉しくて、どんどん話するのが楽しくなっていました。休日はマクマスター大学の学生が、ナイアガラの滝などの観光名所を案内してくれ、最高の思い出となりました。

海外で英語を話すのは、日本で勉強するのは全然違います。私は研修を通じて、英語が通じる喜びを感じましたが、同時に瞬時に英語を発する力が足りないことを痛感しました。今は、在学中の留学を視野に、英語でニュースを聞いたり、福島大学で学ぶ留学生のバディとして積極的に会話をしたりして、英語力を磨いているところです。海外での生活は不安もありますが、日本と外国との学びの違いなど、これからもたくさんのかことを吸収できたらと考えています。



先生方と撮影した記念の一枚。最終日には卒業証書授与があり、先生方がパーティーを開いてくれました



実際に見たナイアガラの滝は迫力満点。水しぶきでびしょになったのも、今ではよい思い出です

※所属・学年は取材当時のものです



奨学金制度について

福島大学には経済的な負担軽減を目的とした給付型の奨学金制度が準備されています。これまで、交換留学、短期研修、海外インターンシップに参加した多くの学生が奨学金を受給しました。

詳しくは、
国際交流センターに
お問い合わせください！

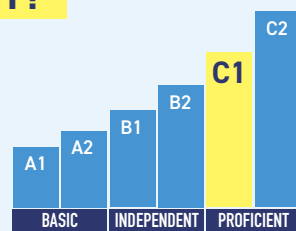
C1 Project

英語圏への交換留学などをを目指す学生に求められるのが、IELTS™やTOEFL®などの語学試験で目標スコアをクリアすることです。国際交流センターが提供する「C1 Project」は、語学試験対策の専門家によるきめ細かな受験指導に人気が集まっています。

C1 Project では、CEFR C1 レベルの語学スコア取得を目標に、英語圏の大学や大学院での学修と研究に必要な4技能をバランス良く伸ばすことができます。

What is C1?

CEFR (セファール) *は語学力の国際基準で、外国語の熟達度を6つのレベルに分けて評価しています。C1は上から2番目に高いレベルで、熟練した言語使用者として分類されており、就職、大学院進学など、英語圏で問題なく活躍できる目安となっています。



* Common European Framework of Reference for Languages

Special Features

● TOEFL ITP®で学修成果の可視化 (年2回)

● 発音重視

発音 (音読) にフォーカスした語彙力の強化を実感し、リスニングとアウトプットの素地を作ります。

● 日本語の使用

通訳訓練法を用いた指導のため、徹底的に日本語を使います。日本語との比較を通して英語を分析的に理解するとともに、言い換えや要約の力を高め、論理的で中身のあるアウトプットを実現します。



納得ゆえの主体性で自分の「限界を突破」しよう

自主学修プログラム

刺激と気づきに満ちた学びあいの場で、学年・専攻・国籍・習熟度の異なる仲間たちとともに、英語学習の頂点に挑みます。

1 年次 Academic English Literacy

大学で英語を学ぶ必要があるのか？あるとすれば、何を指し、どのようなアプローチを取るべきなのか？まずは、そこから考えてみましょう。日本語を含む言語間の比較を通して、主体的な外国語学習に必要な「音韻・語彙・文法」の感性を磨きましょう。

2 年次 Path to CEFR C1

Path to CEFR C1 (前期・後期6科目)を1年間集中的に履修することで、英検1級レベルへスキルアップすることが可能です。

【履修要件】
原則としてAELまたは自主学修プログラム履修済みの方

最短
2年次に
C1達成

3 年次 無限大の可能性への挑戦

3年次より、高い英語力を武器に広い視野に立ち、各自の専門性の向上に邁進することができます。

and/or

英語学習で得られた自信と感受性をベースに言語間の共通点と相違点を比較しながら、中国語やドイツ語、スペイン語など、多言語のマスターを目指します。

イベント

英語学習以外にも、留学経験者による体験談、福島大学に留学中の学生による出身大学・自国文化の紹介、留学に関する情報提供などを行っています。また、ゲストスピーカーによる講演会も開催しています。

新入学生 インタビュー

経済経営学類
1年
藤澤 美妃さん

盛岡中央高等学校出身



進学の決め手はC1 Project。充実した英語教育が魅力です！

私は高校生の時にC1 Projectの存在を知り、福島大学への進学を決めました。経済経営学類の推薦入試では「外国語に関する優れた資格」という規定があったため、勉強を重ねて英検準1級を取得し、大学にも無事合格。念願だったC1 Projectの講義に参加することができました。福島大学ではまだ1年次でC1を達成した学生がいないと聞いていたので、それを目標に今後も英語力を磨いていきたいです。

※所属・学年は取材当時のものです

「フクシマ」を世界に発信

Fukushima Ambassadors Program



福島大学では、学生交流協定校から短期間留学生を招き、福島県内各地に赴いて地域住民や学生等との交流を行うことにより、震災後の福島のことと魅力を伝えるフィールドワークプログラムを行っています。

2012年にスタートした本プログラムでは、これまでにのべ700人以上の福島大学生が世界各国の留学生と共に、福島の「過去」「現在」「未来」について学んできました。

震災経験者の講話、福島第一原子力発電所の視察、研究所や農地などでの実地研修、地域の復興を支援する体験活動など、多面的・多角的かつアクティブなアプローチで参加者の理解を深めます。

本プログラムに参加することで、留学生をサポートしながら、福島のアmbassadorとなり、世界からみた福島のイメージ変革にも貢献できます。学内にいながらできるプチ留学体験ですので、ぜひ参加してみてください。



こんな学生にオススメです

- 国際交流に興味がある学生
- 将来、留学を考えている学生
- 英語でコミュニケーションをとってみたい学生
- 福島の魅力や現状を世界に発信したい学生

集中講義を履修して参加するほか、一部はボランティアとして参加することが可能です。履修生には、B2レベル以上 (IELTS 5.5以上) を推奨しています。



プログラム内容 (スケジュール例)

- DAY1 大学でのオリエンテーション
- DAY2-5 震災と復興について理解を深める
- DAY6-7 地域住民との交流 (ホームステイ)
- DAY8 復興の現実を知り課題解決へ
- DAY9 クロージングセッション



Fukushima University International Center

国際交流センター

平日9:00 ~ 12:30 / 13:30 ~ 17:00



福島大学国際交流センターは、国際交流の窓口として学生の皆さんのサポートや、情報発信を行っています。ここでは、本学と学術・学生交流協定を締結している大学の情報や、留学の報告書などを閲覧することもできます。また、留学や語学学習に関する図書の貸出や、希望者には語学試験対策も提供しています。留学に関わる生活や学習の相談、在留資格、地域のイベント案内、手続きなども確認することができます。

